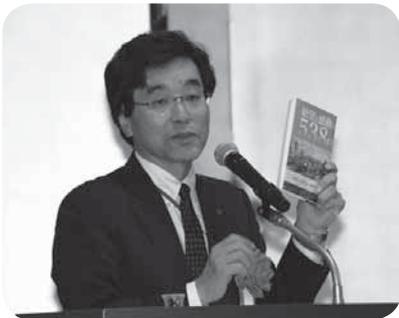


講演会

「紙つなげー日本製紙石巻工場復興の取り組み」

佐藤 信一 氏 日本製紙株式会社 専務執行役員

「2016年9月印刷の月」の記念講演会は、日本製紙株式会社・専務執行役員の佐藤信一氏をお招きし、「紙つなげー日本製紙石巻工場 復興の取り組み」をテーマに開催された。2011年3月11日東北地方を襲った未曾有の大震災により壊滅的な被害を被った石巻工場について被災時の状況を生々しく詳述、切迫した現場を再現してみせた。そして復旧・復興へ向けての全社一丸となつての取り組みの実践を述べた上で、無防備な災害対策によって引き起こされる災厄は、人的・物質的被害に止まらず事業の継続に取り返しつかない結果をもたらすと警鐘を鳴らした。



本を片手に熱く語る佐藤信一氏

佐藤氏は、「時間をかけないで復興に臨んできた行程とその取り組みを紹介したい」とし、震災発生と被災状況、復興の道り、今後の防災対策について講演を進めた。

まず、東北にある日本製紙の3つの中核工場の被災状況を説明。中でも石巻工場は震災そのもの、そして津波の影響をまともに受けて壊滅的な被害を受けた。この復旧には1年半もの歳月を要した。石巻工場にある8号マシンが稼働したのは、まさに震災の翌

年の9月14日のちょうど今頃（講演開催時間）全員が万歳をし、復興への実感を噛み締めていたとのエピソードを披露した。

また、震災直後の様子を次のように振り返る。14時46分に地震が発生、わずか18分後の15時4分には守衛本部より一斉構内放送で避難指示が出て28分で全員が避難を完了。加えて停電しても使える設備の構築により1306人の従業員を一人も失うことなく生還させた防災対策の勝利でもあった。

この後の石巻の復興の道りは、最初に復興計画が策定され、計画に従って被災状況の把握からはじめられた。港湾、出荷設備の損傷は大きく、ガレキの撤去作業、構内清掃、港湾設備の復旧と着実な作業が進められた。震災の翌年11月末に、石炭船の入港、チップ船の入港にこぎ着けたという。石巻工場最大のN6抄紙機は2年経った3月9日に操業再開、その年の8月末に工場は完全復興を果たし、長い戦いに一応のメドがたった。

まとめとして、佐藤氏は今後の防災対策について説明。自治体の津波対策に加え、独自の防災対策として施設防波堤の設置を決定、さらに防災設備を備えた新事務所の建設、発電機・水槽など非常用の



講演する佐藤信一氏

設備の敷設などを計画。

まとめとして佐藤氏は、震災からの教訓を4つあげた。第一は、災害訓練の実施・啓蒙、第二は迅速なトップの判断で、それぞれの組織の長も同じだと指摘、第三は、支援物資の輸送、人材の派遣などグループ一丸となった復興活動、第四として、お客様を中心としたステークホルダーとの信頼関係をあげた。

最後にエピソードを披露。生産不足に手を差し伸べてくれたのは他メーカーの方々だったことを明かし、「事業活動で培った信頼関係の重要性を再認識した」と振り返り、講演を終えた。



講演会場の模様